

大輪の花を咲かせた

「大和魂」

●【ウズベキスタンとは?】

『ウズベキスタン共和国』という国をご存じですか?と問われても、正直「あまり馴染みのない国:」私もそういう感想でした。でも実は、私達日本人とは切っても切れない深い縁のある国だったのです。親日感情が強い中央アジア諸国の中でもウズベキスタンの日本人への好感度は飛び抜けているといえます。当欄では、ウズベキスタンに大輪の花を咲かせた「大和魂の物語」をご紹介します。

中東に近いロシアに、ウズベキスタンという国があります。「スタン」というのは「国」という意味です。ウズベキスタンは中央アジア5ヶ国のうち中央に位置する国。ユーラシア大陸のちょうど中央に位置し、古代からシルクロードの中心地として発展したオアシス都市として栄えました。13世紀にはモンゴル帝国に征服されますが、14世紀になるとティムール王朝が興って、中央アジアから西アジアに至る広大な帝国を築き上げた歴史を持ちます。それゆえ人種も多様で、ウズベク人、カザフ人、キルギス人など1つ1つ数え上げていくと、民族の数は実に120を超ええると言われます。まさに「人種の坩堝(つぼ)」です。同じ「人種の坩堝」と称されるニューヨークではそれぞれ異なる人種の人たち

が独立して存在しているという印象を受けますが、ウズベキスタンでは人々が溶け合い、どこか渾然(こんぜん)とした統一感が感じられる不思議な国。そのウズベキスタンの首都タシケント市に『国立ナヴォイ劇場』があります。中央アジアでは最も格式が高い劇場かつ世界的な観光地として知られています。実はこの劇場は、日本人技術者が建築した建物。この『ナヴォイ劇場』完成に至る日本人の大和魂に根づいた感動実話を紹介します。

●【過酷な抑留生活】

時は昭和20(1945)年、日本は第二次大戦敗戦。日本がポツダム宣言を受諾し、日本軍の武装解除後にソ連が不可侵条約を破って(国際法を破って)侵攻してきました。多くの日本兵や在外日本居留民が連行され、シベリアに拉致されました。強制連行された日本人は、旧満鉄の職員や技術者、関東軍の工兵ら20代〜30代の若者2万5千人の技術者達でした。シベリアに抑留された日本人は65万人。このうち2万5千人がこのタシケント市内の13箇所(収容所)に入れられました。

使役させられた日本人たちの様子は、山崎豊子氏の小説『不毛地帯』に詳しく紹介されています。「裸にされて並ばせられるとすぐ前に立っている男の肛門まで、上から見えた。ろくな食事も与えられず、全員がそこまでガリガリにやせ細っていた。毎日朝早くに起床し、へとへとになるまで作業を続け、まともな休日もなく、更に食事も粗末で半分腐ったジャガイモや骨ばかりの羊の肉、小麦と水だけという事もあった。

食料は常に不足、栄養失調にもなり、南京虫(なんきんむし)に悩まされる劣悪な環境下でした。シャワーは月に1度きり、お湯もあまりなく寒さに凍える日が続きまし」と、ある。

ソ連は多くの日本人を捕虜にし、当時ソ連の一部だった「ウズベキスタン」の労働施設へ送り込んでいました。そこで日本人達を待っていたのは、基礎工事のみで、建設途中のオペラハウス「ナヴォイ劇場の建設」でした。

●【ナヴォイ劇場】

昭和20(1945)年に始まり、革命30周年にあたる昭和22(1947)年の10月までには完成させよとの過酷な命令にもかかわらず、「ナヴォイ劇場」は予定していた工期を数ヶ月も短縮し完成しました。威風堂々とした外観、美しい模様や繊細な彫刻。過酷な労働条件の中、細部の装飾にまでこだわりのめかされているのは、まさに職人芸です。劣悪な環境下で強制労働によって作られたとは思えぬほど美しい「ナヴォイ劇場」はレンガ造りの3階建て、地下1階、1400席を備えた建物です。旧ソ連時代にはモスクワ、レニングラード(現・サンクトペテルブルク)、キエフのオペラハウスと並び称される、ロシアの四大劇場の1つに数えられる一級品となりました。

●【捕虜となった日本人の心は?】

「日本人として恥ずかしくないものをつくろう」と、どんなに理不尽で過酷な状況下にあるといえども、それでも諦めずに日本人としての誇り」だけは失わなかったの

です。彼らはひたすら働き、そんな姿を見つめていた地元の子供がパンや果物を差し入れるようになりました。そんなある日、パンや果物が置いてあるいつもの場所には、手作りのオモチャが置いてありました。強制労働で疲れきった体にも関わらず、日本人は受けた恩に対して精いっぱい感謝を伝えようとしたのです。無事、日本に帰還された方もいらつしやいます。彼らは「後世に日本の恥となる様な建築は作らない。その上で、全員が元気に帰国すること。そんな強い意志でナヴォイ劇場を建設した」と述懐されておられます。

●【日本人のイメージ】

拉致問題担当大臣などを歴任した中山恭子元内閣特命大臣がウズベキスタンに大使として赴任したのは、平成11(1999)年のことです。大使の仕事は両国の友好関係を深めることをはじめ、経済発展の支援や、両国の文化交流、人的交流などが、行く先々で、必ずと言ってよいほど、現地の人たちが教えてくれることがあったそうです。「いま走っている道は、日本人がつくった道だ・あの建物は日本人が建ててくれたものだ・あそここの運河も日本人がつくってくれました・このアパートは日本人が建てたものだから強くて安心なんです」と。それも、誰もがまるで我が事のように自慢げに話してくれる。他にも首都タシケントにあるナヴォイ劇場やベカバード市の水力発電所など、日本人によって建てられた建造物は枚挙に

暇がありません。「彼ら日本人は、どんなに辛く厳しい仕事であつても、ともに励まし合いながら、規律を守り、勤勉に、几帳面に、与えられた仕事をやり遂げました。時間がきても、その日の仕事が終わらなければ仕事を続けていた。日本人はうまくいかない時には色々工夫をしてやり遂げる。日本人がつくるものは全て良いもので、本当に凄い人たちだった。とても大切な友人です」と。

また、カリモフ大統領は敬意を表して次のように仰っています。「子供の頃、母親に、日本人が働いている仕事場によく連れていかれて、『あの日本人たちをよく見ておきなさい』と言われた。当時、強制労働を強いられていたのは日本人だけではありませんでした。更に大統領はこう続けられたそうです。「日本人たちは監視の人間がいようがいまいが同じ様に仕事に励んでいたのに対して、他国の人々は監視がいなくなるとすぐ仕事の手を休めてしまった」。陰日向なく一所懸命に働く日本人。その姿を我が子の目に焼き付けようとした母。そしてその母の思いを受け止め、日本人を見習って一所懸命に働くこうと心に誓ったカリモフ少年。後にウズベキスタンの大統領となつたカリモフ氏に、「自分が大統領になれたのは、日本人のおかげです」と言わしめたのは、紛れもなく、当時の日本人の姿勢でした。

「戦いに敗れても日本人は誇りを失うことなく骨身を惜しまず働いて立派な仕事を残した。素晴らしい民族だ」と。日本人たちは、黙々と作業をした。その姿に、

市内の作業現場では、タシケント市民はソ連と戦争をした日本人に、かえって尊敬と畏敬の念を抱いたといっています。

苛酷に働かされた工事でも、決して手抜きをせず真面目に仕上げた日本人。栄養失調でポロポロの体になりながらも、愚痴も文句も言わないどころか、明るい笑顔さえあつた日本人。昨日、具合悪そうだったけれど、笑顔を向けてくれた日本人が、今日は来ていない。どうしたのかというと、昨夜栄養失調で死んだという。それほどまでに過酷な状況にあつてなお、きちんとした仕事をしてくれた日本人。だから、いまでもウズベキスタンの母たちは子供に「日本人のようになりなさい」と教えているといっています。「日本人は正々堂々としていた。ドイツ人捕虜が待遇改善を叫んでいたのに対して、彼らは日本のサムライの精神をもつていた。強制労働でも粛々と作業につく姿を見て、我々市民は感銘を受けたのです」と。

1991年に旧ソ連から独立して新国家建設を進めるウズベキスタンのカリモフ大統領は、日本の明治維新や戦後復興をモデルとして「日本に見習え」を合言葉にしています。

日本人たちの勤勉さ、規律正しい行動、確かな技術などは、現在もずっと語り継がれています。「日本人はずい。あの国は素晴らしい」と。こうして、戦時中の日本人の姿は、そのまま、日本人のイメージにもなっているのです。一緒に働いていたウズベキスタン人の赤ちゃんのために、日本人が手作りの揺りカゴなども現存しています。

●【マグニチュード8】

「ナヴォイ劇場」完成から約20年後、昭和41(1966)年4月26日に、なんとタシケントにマグニチュード8という巨大地震が襲います。強烈な大地震で町の建物は崩壊し、辺りは一面瓦礫の山に。しかし、そこでウズベキスタンの人々は「奇跡」を目の当たりにしたのです。そこには変わらぬ姿で凍と建つ、無傷なナヴォイ劇場がありました。タシケント市には、二度、大地震が起こりました。地震で、市内の建造物は、そのほとんどが倒壊しています。ところが、二度の大地震に、ナヴォイ劇場はビクともしなかつた。被災者の避難場所としても使われ、多くの市民の救いとなった「ナヴォイ劇場」。

今では、ウズベキスタンといえは「ナヴォイ劇場」と言われ、世界的な観光名所として有名になり、中央アジアでは最も格式が高い劇場として知られています。

ナヴォイ劇場の建造は、500人の日本人技術者が担当しました。そのうち79人が、建築途中で亡くられています。つまり10人にひとりの方が亡くなったのです。

●【プレートについて】

昭和28(1953)年3月にスターリンが亡くなり、ソ連崩壊後ウズベキスタンが独立を果たした際、カリモフ大統領がすぐに手掛けたことの1つが、ナヴォイ劇場にかかつていたプレートの掛け替えでした。プレートには劇場建設の経緯が刻まれており、文中には「日本人捕虜が」とあつたそうですが、それを「日本国民の」に書き替えた

といっています。実は、これが大統領になつて最初に行った外交面での措置だったのです。カリモフ大統領が、「彼らは恩人だ。間違つても日本人捕虜と表記するな。日本とウズベキスタンは一度も戦争していない」と厳命したそうです。壮麗なナヴォイ劇場にある、日本人抑留者の功績を記したプレートにはウズベク語、日本語、英語でこう書かれています。

「1951年から5年にかけて極東から強制移住させられた数百人の日本人がこの劇場の建設に参加し、その完成に貢献した」と。日本人の抑留生活でウズベキスタンの人々に与えた影響は計り知れないものがあります。

本日の外交と言うものは、虚偽の捏造(ねつぞう)にあらず。この様な人と人との真心のつながりがこそが、真実の友好を結ぶものであると思います。日本人によって建設された建物、運河、道路などのインフラが現在でも数多く機能しています。どんな状況下でも誇りを持って仕事を全うする大和魂。私達が決して失つてはいけない心持だろうと思います。

副住職 谷川寛敬 拝



(YouTube 動画)

<https://youtu.be/YviSpkZS2d>